

今治さくらいの物語  
子どもたちが主役になる日



桜井には、子どもが主役になる日がある。それは5月5日の「こどもの日」、綱敷天満宮の例大祭である。祭りの朝、獅子が舞う本殿から、3台の子ども神輿が勢いよく駆け出していく。子どもたちは全力で走りながら、境内を南、北、西、東の順に四方固めを行い、境内を出て衣干岩の御旅所へ。子ども神輿を先導する子どもは、鬼の面を被り、竹の杖を道に打ち付け、邪気を払いながら歩く。御旅所では、幼い巫女が、左手に扇、右手に鈴を持ち、太鼓の音にあわせて、人々の健康や地域の繁栄を願って舞を奉納する。その姿は美しく、大人びて見え、地元の女の子たちの憧れでもある。夕方になると、練り歩きを終えた3台の神輿は最後の御旅所に集まり、神事の後に神輿の屋根を覆う赤い布を小さく切って、御守りとして配る。それを握りしめた子どもたちは、また神輿を担いで本殿へと駆け抜けていく。子ども神輿は、綱敷天満宮から浜地区、郷地区、そして旦地区をまわり、遠く石風呂まで、一日かけて渡る。再び綱敷天満宮に戻る頃、先導の子どもが持つ竹は短くすり減っている。これこそ、桜井の子どもたちにとって、誇りと成長の証だ。

桜井地区地域水産業再生委員会 × 愛媛大学井口梓研究室